

## 令和2年度横須賀市総合教育会議 市長及び教育委員の考え

### ■ 議題「次期教育振興基本計画策定に向けた横須賀の教育の未来像について」

#### (荒川委員)

私のほうからは、学校教育を中心にお話しをさせていただきます。

子どもは、どの子も固有のよさを持って生まれてきています。そのよさを学校教育の中で見つけて伸ばしていくことが大切だと私は考えております。

子どもたちのよさは、教科の学習で現れることもありますし、特別活動や係活動、委員会活動、部活動でよさを発揮することもあります。いずれにしても、自分のよさを認めてくれる友達や先生がいる。そんな時間や場所が、どの子にも学校の中にあるということが大切だと思っています。

各学校では、自校の子どもたちの実態を踏まえた学校教育目標の実現に向けて、子どもたちをどんなふう育て、何を身につけさせるのかを話し合い、具体的な行動計画を立てて実践しています。学校教育目標には、横須賀市の目指す子ども像である人間性豊かな子どもや、生きる力の育成などの項目の内容が反映されていると感じています。

その中で、多くの学校で学力向上に向けた校内研究に取り組んでいて、地道に日々の授業実践を重ねています。しかし、本市児童生徒の学力については、まだまだ平均正答率が全国平均より低い状況にあります。

学力に関しては、小学校1年生、2年生といった早い段階で向上させていく必要があります。これまでも学習習慣を身につけさせるために、低学力層の児童生徒の割合が多い学校への学習支援員さんの優先配置など、様々な手だてを打っていただいていたのですが、なかなか改善しない状況が続いています。

学力として何が必要か考えたときに、読み書きそろばんといった基礎的な力や、学習に取り組む粘り強さや自制心といったことも欠かせません。また、今日のように変化の激しい時代では、新たな価値の創造や未来を切り開く力も必要です。

また、学校では多くの友達や教師に巡り会うことで、人間関係が豊かになり、幅広い価値観と社会性が育まれることも大切な要素だと思います。そのためにも、昨年の総合教育会議で議題となった学校規模の偏りについても、しっかりと議論の中に入れることも大切だと感じています。といいますのは、小規模校においては競い合う場面が少なくなることや、多様な意見を取り入れる学習ができにくいこと、集団種目を通じたルールやチームワークなどを体得しにくいこと、それから、学習形態が固定化されるという点が気になります。一方で、



大規模校では、一人一人の子どもが活躍する機会が少なくなることや、教師と関わる時間が少なくなること、行事等の移動に時間がかかること、特別教室の割り振りや少人数授業や選択科目の授業が制限されることなどが挙げられるからです。

学びを深める要素としては、読書や体験学習、友達や先生との話合い、地域の方をお迎えしてお話を伺うことなど様々ありますが、子どもたちが将来の可能性を広げるという点において、学力を向上させるということはとても重要です。未来の子どもたちのためにも、あらゆる課題を克服していく必要があると考えております。

さらに、地域や家庭との連携を密にして、学校、家庭、地域がそれぞれの役割を果たしながら、信頼し合い、協力し合いながら子どもたちを育てていくことが、未来の子どもたちの幸せにつながると考えております。

#### (澤田委員)

2030年の横須賀市の子どもたちには、自分と異なる人を認め合い、多様な人々と協働して社会で活躍できる力を身につけてもらいたいと思っています。

そのような子どもたちを育成するための取組として、私からは2つの観点からお話をさせていただきます。

1点目は、今般改訂された学習指導要領で求められている資質・能力の育成の着実な実行、2点目は、小・中学校の連携促進を含めた学びの連続性、切れ目ない支援の実施についてです。

まず、1点目の学習指導要領で求められている事項の着実な実行についてですが、学習指導要領の改訂の背景では、社会の変化が加速度を増し、複雑で予測困難となってきたことが指摘されましたが、それが今年度、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大により、その指摘が現実のものとなっていると感じています。

緊急事態宣言が発出され、学校が長期間にわたり臨時休校になる、修学旅行をはじめ、各行事が中止になるなど、日本の学校教育の中でこのような事態が現実に起こるなど、思ってもみませんでした。

このような、これまで経験したことのない事項に対応できる資質・能力、次代を果敢に切り拓いていける子どもたちに求められる資質・能力とは何かを考えますと、目の前の課題を自分のこととして自分の頭で考えて表現する力、多様な人たちを認め合い、多様な立場の人が対話や協働を通じて知識やアイデアを共有し、新しい答えや納得できる答えを生み出す力、もちろん豊かな情操や規範意識、自他の生命の尊重なども挙げられます。これらはまさに新学習指導



要領で育成を目指す資質・能力であるといえます。

したがって、この改訂された学習指導要領の趣旨、求められているものを、先生方がしっかり理解し、着実な実施がなされるよう、先生方の研修や授業改善の取組を充実させていくことが大切であると考えます。

2点目は、小・中学校の連携促進を含めた学びの連続性、切れ目ない支援の実施についてです。

少子化により学齢期の児童生徒が減少する中、特別支援教育に関する理解や認識の高まりや、障害のある子どもの就学先決定の仕組みに関する制度の改正等により、特別支援学校や小・中学校の特別支援学級に在籍する児童生徒数は増加しております。また、小、中、高等学校の通常の学級においても、特別な教育的支援を必要とする児童生徒が在籍しています。

さらに、特定分野に特異な才能のある児童生徒の存在や、出入国管理及び難民認定法の改定等により、外国人児童生徒に加え、日本国籍ではありますが日本語指導を必要とする児童生徒も増加しております。加えて貧困やいじめ、暴力行為の発生件数、不登校児童生徒数の増加など、様々な生徒指導上の課題も生じております。

このように、児童生徒が多様化し、学校が様々な課題を抱える中であっても、決して誰一人取り残さないで、一人一人の能力・個性が発揮できる、誰もが大切な人であり、誰もが認められていると感じられる、そんな教育の実現に努めることが大切だと思っています。

そのためには、個々に寄り添い、継続的な指導、切れ目ない支援が必要です。具体的な取組として、これまでも横須賀市は、中学校区を中心とした小中連携教育が推進されてきています。また、今後の小学校高学年からの教科担任制の導入も踏まえて、複数の学校、学校群が連携して指導の充実を図っていくことが大切であると考えております。

#### (川邊委員)

私からは、健康面について述べさせていただきます。

現行の教育振興基本計画では、目指す子ども像を実現するために特に大切にしたい6つの要素の一つとして、心と体の健康を意識し、健やかな体を持っていることを掲げています。そして、学校教育においては、確かな学力、豊かな心、健やかな体のバランスが取れた生きる力の育成を重視していることを承知しています。

私は、未来の横須賀市の子どもたちにも、生涯にわたって明るく楽しい生活を送ってほしいと願っています。そして、そのための基礎となる体力や健康面、



これはとても大事なことだと思います。

昨今、積極的に運動する子どもとそうではない子どもに二極化している傾向や、食生活において栄養摂取の偏りや食習慣の乱れが見られるなど、子どもの体に関わる問題が指摘されています。こういった課題を克服し、未来の横須賀市の子どもたちが心身共に健康に明るく過ごせるよう、学校での教育はもちろん、家庭や地域における日頃の生活においても、子どもたちが運動や食事に親しみ、大人も皆で見守りながら健やかな体が育成されていくという、そのような姿であってほしいと思っています。

一方、喫緊の問題ではありますが、現在はやっております新型コロナウイルス感染症、これも子どもの体や心に影響していると思いますので、常に頭の中に置いておく必要があるかと思っております。

#### (元木委員)

I C TやA Iなどが発展する中、今後、どういった子どもを育てていけばいいか。2030年を見据える上で欠かせない観点ではないでしょうか。

2030年には、今ある仕事の半数はA Iに取って代わられると言われていています。現に単純な入力を主とするような事務仕事はA Iに置き換わってきています。急速なI C Tの発展に伴い、子どものなりたい職業や夢も変わっていくと思います。保護者の立場としては、I C Tを活用し、A Iに使われるのではなく、A Iを使う人間、A Iをつくる人間に育ててほしいと思います。

そのためには、G I G Aスクール構想の一環として整備している児童・生徒向けの1人1台のタブレット端末と、高速大容量の通信ネットワークを活用した教育が必要となります。また、タブレット端末や通信ネットワークといったI C T環境を活用した教育には、教員のI C T活用指導力の向上が不可欠です。ハード面が整いつつありますので、今後はソフト面として、教員の指導力向上に取り組んでいただき、I C Tを活用した教育により、子どもたちが豊かな創造性を備え、持続可能な社会の創り手として育っていけるような教育を実現してほしいと思います。

ここで注意いただきたいのは、I C Tの活用は手段であり、I C Tを使いこなせるようにすることが教育の目的ではありません。今年度から小学校にプログラミング教育が導入されましたが、プログラミング教育はプログラムを書けるようになる、コンピューターを使いこなせるようになることが目的はありません。プログラミング的思考、論理的思考を育てることが本来の目的です。例えばここからスカイツリーまで行こうとしていたとき、交通手段や運賃、時間などから、早く着くための経路を考える。安く着くための経路を考えると



たように、様々な要素から条件に応じ、順序だてて答えを導き出すような思考力を育てるのであり、乗換え案内アプリの使い方を教えるものではありません。

ICTやコンピューターはあくまで手段、ツールです。極端な話、プログラミング教育を行う上では、コンピューターを使わなくてもいいのです。地図や時刻表を用意し、スカイツリーまでの経路を題材に、どのような情報が必要か、どうやったら実現できるかといったことを子どもたちに話し合ってもらうことでも、問題発見力や解決力、プログラミング的思考を育てることができます。ICTの活用ばかりに注目してしまい、本来の目的を間違えないようにしなければなりません。

また、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、オンライン授業の環境整備が急速に進んでいます。ICTを活用することで児童・生徒の学習活動を支援することができます。横須賀市教育委員会で公開している中学校3年生向け学習動画コーナーも、新型コロナウイルス感染症の影響で学校に通うことができなかった、現在通うことができていない生徒さんにとって、とても心強い支援策だと思います。

しかし、一方で、オンライン授業は友達とのつながりであったり、いろいろな人との会話や触れ合いであったりと、子どもが成長していく上で大切なコミュニケーションが希薄になってしまいます。何らかの理由で学校に通うことができない、大勢の人とのコミュニケーションが苦手な子どもに対し、オンライン授業で支援することはよいことかもしれませんが、子どもの成長に悪い影響がないかよく検討した上でオンライン授業を活用すべきだと思います。

子どもの頃からコンピューターやICTに触れることもこれからの時代は大事かもしれませんが、やはりいろいろな人と触れ合いながら学校で学ぶことは大事だと思います。

#### (上地市長)

ありがとうございます。さまざまなことをお聞かせいただきまして、まさに考えることが一致しているので、本当にありがとうございます。

皆さまからさまざまなことをお聞きしましたが、私はまず、横須賀市の子どもはどうあるべきかについてしっかり話し合わなければいけないと考えています。

そして、これからの横須賀市の子どもや学校のことを考えるときに、私はこの変化の激しい社会において、子どもたちが多くの友人の中で人間関係を学び、さまざまな経験を持つ多くの大人、そしていろいろな先生に出会ってもらいたいという思いがあります。



小学校では6年間、中学校では3年間同じ学校に通うわけですが、学校には明るくて楽しい先生もいれば、物知りで話が得意な先生、それから運動が好きで校庭で子どもと一緒に走り回る先生、とにかく宿題が多い先生、少しマニアックな先生とか、少し疑問に思うなという先生もいらっしゃると思う。子どもたちにとっては、好きな先生もいれば苦手な先生もいる。そういうことも当然であろうかと私は思います。

しかし、例えば今まで勉強でつまずいていた子どもが、あるとき担任になった先生の教え方がぴったりとはまって、学習のきっかけをつかむかもしれませんし、また、みんなに人気がない先生がいたとしても、その先生が、悩んでいる子にはとても親しみやすい先生で、その子の悩みを軽くしてあげることができるかもしれません。

私は常々、生きていくということはどういうことかという根本的な問題を、われわれ大人が子どもたちにしっかりと伝え、教えていく。そして、それを子どもたちにしっかりと考えさせるということが一番大事なのではないかと思っています。それは、家庭や地域でももちろんですが、学校においてもいろいろな先生がさまざまな場面で子どもに関わるのが、先ほどの課題として挙がっていた、荒川委員がおっしゃった学力の向上、それから心の問題の基礎になるのではないかと思っています。

澤田委員がおっしゃったように、これからは恐らく世界はあらゆる多様性を受容する、そして和合に向かっていく社会、そうしなければ、この地球全体は駄目になっていくのではないかと私は思っているのですが、この日本社会でも、やはり分断とか批判、さまざまな問題が惹起されている中で、子どもたちがこれからはどういうふう生きていくかというのは、やはり感受性、変化を受容し、しっかりと心を持つ子どもたちがこの未来を築き上げていく。そのためにわれわれは何ができるのかということを考えていかなければいけないということが、われわれ大人たちの使命だと思っています。

ハード面の課題もありましたけれども、いろいろな先生と出会うためには、やはりこれは学校の規模の問題になるのですけれども、一定の規模は必要なのではないかと思っています。

横須賀市の子どもたちはどうあるべきか。夢や理想を市民の皆さまとしっかり共有して、計画策定や目標設定に臨んでいきたいと思っています。

#### (新倉教育長)

各委員の皆様、そして市長におかれましては、今、横須賀市の教育の未来像について、その思いを語っていただきました。本当にありがとうございます。



本日の冒頭に、課長からの説明もありましたけれども、今、教育の抱えている環境については大変厳しいものがあると実感しているところです。しかし、だからといって、ここで下を向いてしまうということがなく、これからの未来の姿を見据えて、そのために行うべきことを明らかにした上で、集中して取り組んでいくことが必要だというふうに自覚しています。

これまでも何度も申し上げてきたかと思いますが、教育の最終的な目標というのは、この横須賀市の子どもたちの未来をどういうふうにしていくか、どんな子どもとしていってもらおうかということにあるのかなと思っています。そういうことにつきましては、市民の方、保護者の方、そして地域の皆様と、本当の平場の中で語り合って、その思いを共有していき、その目的をはっきりさせることが大事だというふうに思っています。

その意味で、来年度、今年中ですが、教育フォーラムをまず開催させていただきたいと思っています。それがまず、入口としてのスタートラインなのかと思っています。そこで市民の皆様のご意見をしっかり聞いた上で、本日お聞きした皆様の思いと統合しながら、次期教育振興基本計画を作り上げていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたしたいと思っています。